





紫家七論 附系圖

目錄

才德兼備
七事共具
修撰年序
文章無雙
作者本意
一部大事
正傳說誤

藤原為章撰



紫女系圖

○良門 内院左大臣冬嗣公六男 贈太政大臣 利基 從四位上 右中將

兼輔 從三位号堤中納言 惟正 從五位下 刑部少輔

為頼 從四位下 大后宮亮 伊祐 從四位下

頼成 從四位下 因幡守 實具 平親王男

今按紫日記云中勢此系よりその流こころを流しよしとて

なすれんをある人とおかしくしを流しよし

式部中務具平親王一人をあるハ此中緒なる人

為時 從四位 越後守 或越前守 儒者哥人

惟規 從五位下 式部丞 母常陸介為信女

紫日記云これより式部丞といひりる人よりいふ史記と

新勅撰旅部云 茲系惟規より越 後由一人よりいふ

いふ婦よりいふとて 後拾遺集云父のりより越後子

中よりいふとて 又云父のりより越の玉よりいふとて

ついでいふとて 續拾遺集云越後より

惟通 從五位下 安藝守

定暹 阿闍梨

女子 紫式部母同惟規嫁左衛門権佐宣孝 今按宣孝卒後仕上東門院

河海抄云鷹司殿從二位倫子宦女之お侍る陪仕上東門

院 又云源氏一節此中より紫上流りてはこれより

よりなる藤式部の名とあり 多めて紫式部と号せし

りし 今按紫日記云左衛門権佐 公任 ありしとて

子若紫とていふ流りていふよりいふとて

さして若紫と稱せられたるは、河海抄の此後やあるは、
又按宣孝系圖、長保三年四月二十五日卒と云、紫日記
合せ考ると、長保三年四月二十五日宣孝卒して、好三四
五年、むらやものむらして、寛弘二三年、此らより、
宮のくまのむらむら、源氏物語のくま、
やと、史記、此種、や、七編、此中、子記、
本、小道長公妾也、後宣孝と嫁と、
傳、後、の、語、

女子 賢子 父宣孝 嫁太宰大貳高階成章 因号大貳三位
後一條院御乳母

榮子 物語 花見巻 云うら、此、此、史、の、と、大貳三位云、

女子 父同上 辨句 局
後冷泉院御乳母

榮子 物語 楚王此多巻 云、第、二年、八月、三日、後冷泉院

法誕生ありし、此乳母といふ所、云、大、此、此、史、の、む、
武、ア、む、此、史、此、後、并、左、衛、門、將、の、此、子、う、
中、の、里、り、る、と、大、此、史、の、上、東、門、院、之、左、衛、門、將、と、兼、隆、心、
此、の、乳、母、を、御、り、し、武、敏、の、第、二、年、此、ら、の、
て、大、此、史、の、傳、と、見、也、又、殿、上、花、見、巻、云、長、元、四、年、九、月、
廿、五、日、上、東、門、院、御、右、侍、傳、奉、此、ら、云、つ、此、車、は、左、衛、門、將、
左、衛、門、將、左、近、衛、將、左、衛、門、將、の、左、衛、門、將、の、車、は、左、衛、門、將、
此、後、此、車、の、先、の、と、大、浦、平、少、將、義、濃、の、小、舟、を、左、衛、門、將、
車、此、史、の、宣、旨、三、位、を、宣、旨、三、位、を、宣、旨、三、位、を、宣、旨、三、位、
此、史、の、宣、旨、三、位、を、宣、旨、三、位、を、宣、旨、三、位、を、宣、旨、三、位、
并、此、乳、母、の、父、と、母、此、史、の、宣、旨、三、位、を、宣、旨、三、位、
三

いふべき物のやうな是の長元四年よりしては三つをいふ
こゝやあるはさうするまでと云ふよとせられたる

さし礼記の巻 後普光院 良基公作 云紫式部源氏白氏文集より

とぬるやいなとこと後系極殿も作られた 後系極

殿の諸詞諸抄よんてあめつとて覚し侍るすもそれついで

しある一節

増鏡云 いとうと 友水云飛殿のつとるよとを結しては水

て水飯やうれ相など口口上系部殿上人は結させておつと

いふついでともあはれいふ古の紫式部をいふとていふは源氏

物語にも近き川のあふ西川をなれるとぬとては物語上人

ててついでともあはれいふ古の紫式部をいふとていふは源氏

七論

其一 才徳兼備

六百番哥合判 詞云源氏見サラ おろしや才徳ともよとあはれするは丈夫とていふるもあ

ム哥ヨニ無下ノ コト云云 有むる中して女とて大和をいふはいと色中流るるべしとて

其頃作者名 カ源氏見又人ヤ いふは源氏物語を論する人多く紫式部の英也をのこ称

アラソレラ後成ル ノカク玉ル心アル しては此実徳をいふるは物語の中をあらはれし

へ源氏ヲ九三詞 花ノウミテ見ル 式部もあはれし物語の才徳をあらはれし

源氏見又人ト云 ヲ源氏ヨミテモ 日記をいふは此氣象をいふるも此実徳をあらはれし

ヘ三学若心用 ユキナリ やすよと似る人もなく才徳兼備の賢婦なるを先物語に

うまていふるもあはれし 紫式部 紫式部の才徳をあらはれし

なる物語 か なる物語 か なる物語 か なる物語 か なる物語 か

一とてくまを花散里に物福とせす藤の下の石にあや
まらむとくひくてもやく入き一結ひ釣魚の并院のぬくたふ
早と一結ひるむらうれ上の出こく人これききうをの
まするあきまの君れ父まの忠誠をまのわするなま
まらふ此婦徳をある一こまは忠道はあかなまをま
実なるをまの免あま一甲一めを志免一まらあ
良武部うんをまのこしといれまの夢物後より記る一こ
まら一こまをあまのままもよむ人もあまの他の一こ
れやうよのこ思もあまも本人のあまの偃師あまのま
まをまのまら一又これ日記をよまもこれ大抵をまの
し

紫日記よまのまら一人をまのまら一こまをまのまら
まら一こまら一こまをまのまら一こまをまのまら
まら一こまら一こまをまのまら一こまをまのまら

今按人を指し一歌をまのまら一一人情を
まのまら一人をまのまら

又云くまのまら一まのまら一まのまら一まのまら
まのまら一まのまら一まのまら一まのまら
まのまら一まのまら一まのまら一まのまら
まのまら一まのまら一まのまら一まのまら
まのまら一まのまら一まのまら一まのまら
まのまら一まのまら一まのまら一まのまら

いさむをちとふ人の光よまをらふつむもて人
の中よまもいさむちかき物まといて物色か
えらうちと人いひくわ^{いれ}なる人し物色れうちし
あしとあし人のまよまうさる物りあるもこれ
うく物まよまも物色くく^える人いひく
とられあつるまらうちと人いひまよまをちかき
まよまをちとる物色まよまをちかきまよまをちかき
まよまをちとるまよまをちとるまよまをちとる
まよまをちとるまよまをちとるまよまをちとる
まよまをちとるまよまをちとるまよまをちとる

きあうちよ人を人まをちかき物まといて物色
人いさむ人いひく^{いれ}まよまをちかき物まといて物色
まよまをちとるまよまをちとるまよまをちとる
まよまをちとるまよまをちとるまよまをちとる
まよまをちとるまよまをちとるまよまをちとる

今按武部と未対面の人のおまひやまの武部の話よあま
まよまをちとるまよまをちとるまよまをちとる
まよまをちとるまよまをちとるまよまをちとる
まよまをちとるまよまをちとるまよまをちとる

上取の渡
まよまをちとるまよまをちとるまよまをちとる
まよまをちとるまよまをちとるまよまをちとる

まよふも... 徳に申す女は... 今按武勲物... 孫... 女... 今按此後... 又云... 物...

今按武勲物... 孫... 女... 今按此後... 又云... 物...

今按此後... 又云... 物...

又云... 物... 今按男之... 又云... 物...

今按男之...

又云... 物... 今按此後... 又云... 物...

今按此後... 又云... 物... 勿論よく...

男も女もいふていふをいふ

右此数件を味ひしむるに不道よあるが故に戒よるのみ又
世宗以下此風儀用なきにあらざらん武初よりあるに非ざるを
まてを考れ人のうまうたうししゆるにされど武初の婦徳
をいふにても物里又宣孝の長保二のひに卒して武やとめ
まをなすを女なれど上东门院よても是も倫子殿よてもこれ
出されど是はのち道長公せよしし強よ武やとめとの
まてを強をえよし

日記寛弘五年此文云々殿の戸花つらひに見ゆせばわかれうち
まての釣の流もまてちらぬ殿ありせ給ひて流は身
えしてやまありしりせよ橋のまてなるをいふこれ

今物式部寮居
辛若丸五三由テ
仕志アリケルニヤ
正傳記誤ノ所
引オク玉葉等
ニテオハカルヘシ

いふにさうなるを一枝をせ給ひて木丁れうカクシ
のそを流して流さされいふもまてなるよとあり給れお
まてなるにまてなるにまてなるにのいふまてなるに
つては祝のいふよまて

如命まてなるにまてなるにまてなるにまてなるにまてなるに
これ源内約のまてなるにまてなるにまてなるにまてなるに

白き流を流してまてなるにまてなるにまてなるにまてなるに
誠は武やとめなるにまてなるにまてなるにまてなるに
又云行幸ちくたなるにまてなるにまてなるにまてなるに
おのりもまてなるにまてなるにまてなるにまてなるに

道長公甲二式部々年今物式部
オハカルヘシ

ありては...
 のまゝ...
 なるや...
 し...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

此哥千載集入

...
 ...
 ...

な...
 ...

今按此述懐を名よ式初めれまな...
 君のこゝ...
 ぬま...

又云寛弘六源氏の物語上東の院...
 ...

...

...

...

...

又云、殿日記の御戸を多し人ありて、
さし書とせてあり、多しつて先ん

乃去云、
いよとまう、御戸を多し人ありて、
さし書とせてあり、多しつて先ん

今按、道長公此を、八年月、
いよとまう、御戸を多し人ありて、
さし書とせてあり、多しつて先ん

いは、これ其節と、日記を、
いよとまう、御戸を多し人ありて、
さし書とせてあり、多しつて先ん

考、さう人の、道長公此を、
いよとまう、御戸を多し人ありて、
さし書とせてあり、多しつて先ん

物いひさ、御戸を多し人ありて、
いよとまう、御戸を多し人ありて、
さし書とせてあり、多しつて先ん

沙汰し、日記の御戸、及、今、
いよとまう、御戸を多し人ありて、
さし書とせてあり、多しつて先ん

そ、あや、と、御戸を多し人ありて、
いよとまう、御戸を多し人ありて、
さし書とせてあり、多しつて先ん

な、いよとまう、御戸を多し人ありて、
いよとまう、御戸を多し人ありて、
さし書とせてあり、多しつて先ん

し、いよとまう、御戸を多し人ありて、
いよとまう、御戸を多し人ありて、
さし書とせてあり、多しつて先ん

い、いよとまう、御戸を多し人ありて、
いよとまう、御戸を多し人ありて、
さし書とせてあり、多しつて先ん

人、いよとまう、御戸を多し人ありて、
いよとまう、御戸を多し人ありて、
さし書とせてあり、多しつて先ん

女らしき父の苦い声もさしむをばく人割しきと志
しうごらにいさぜつゆるよももこ

今按武部女とて字同好ある女子章なくもやくやと見よ
わらう後ひこ女序たう後なく

水鏡跋詞中ニ
紫式部光源氏十
トカキテ侍ルサニ
夕人ノシロサヤ
ハ見ルサレトモノ
又云た馬の肉の一條院いふ人竹里もあまふかた思ひくもえ志
里のぬらうささうごられおらうすは竹里の肉の上
のちへこれ物論人よふまは流ひつゝきかきしりるよ此人を
日本記をこそよと流あれはすとよさえまこしこのよ
せらるも物論かこしころよといしころさえうあるに殿上人を
よひひらして日本記の流の流をいふるをいふるよ

てさえまりかき物人よこれと武部源といふ人のさ
もそ史記といふ物もましめきかきひつて此人をを
くまらるるまらるる物もあまきとまこし竹里といふ
文よんいしる親なはごしをのさよてめいぬとも章な
くまらるるつよまきとれ物

今按此女も男子なりしを在今はあまびるまも学生ある

又云之のちへいし文集に取れよとせ流ひきしとさうさ下れ
るあま一あまもほしまもあひまも一とていも無びる
人のさあまぬまはひらよ寛弘四年かきしこれあまもを樂府とい
ぬら二まきと志とまこしとてあまてはれまをせりる
くらし物也

トキニ日本紀ノ
御局ナトツケラワ
ラヒケリトソヤガテ
式部カ日記ニ書
テ侍ルモル
此日本紀トイハルハ
一部ヲサシテイヘル
ニアラヌ六国史ニ
ワタリテイフト見
ルハシ

今按世日記の叙く武勅、学憲此流一と桓のありし言
さし入るる古名書より一なる方日本紀史記白氏文集を
とよむるべきものありしに全 此外三史五經の考し
きと私家此種諸家の日記純中孝節王記をく和歌此集在今
下家 婦るき物記法詠曲あり也香 弦くるり 裁縫など
諸童子通し 多る叙し物記并に物記の件より 記し
ちる人 一 惟規なるもあや一 きたささく 物記しをいふ
は童女の的を聰明強記して 天然の女善く此大きなる
つゝあつたよひもあつたよひの何れも物記をいふ
しと物記されの徳も也しうちあひする 賢婦人のいふ
多る物記されも容易く看過せしむ

其二 七事共具

父為時を管三品文時の弟子とて高名此学者又父をよ
きて集もえりいふ多ることを父して生きた 兄惟規も
後拾遺に始る末此集にも入るる前人のささく物記し
つゝあつたよひもあつたよひの何れも物記をいふ
を名れも 聰明のつゝ神童なるもいふ 生二 おさあつたよひ
さし入るるも女に学問とをいふ物記もよく此学憲此下を
男もあつたよひ和漢の積事とて音樂以下の記あつた
よひあつたよひと名ふ千載集云上東門院に侍るを里よりあつた
をいふ女房せりもこれついでに第つて之に申すてんといひ
て侍り候也いける此書式ア 藤原をいふささく和歌此集をいふ

新才戒集巻二
アサカラスタミル
男ノ心ナラヌ肥後
圃ニアリテ侍ケル
カ便ニツケテ文ヲ
オコヒテ侍ケル
コトニハ武部
アヒミトオモフ心
松浦ナルカニシテ
ヤカケテシラン
玉葛巻ニハ此
ヲカケルハシラ
御ケルハシ

わろをよやくや人の多ぶ移ん此輩此侍候ももそは樂也也
と多くし禁裡院中中宮親王掾家の内くこも多し
ひく元日節舎よりて一先追難といふこと恒例條時一年
のふる或ハ前合法合番合遊瀟々と優美なるも此うさるる
生眼ミヤこえ多し高代もあらず上りこるす又衰世なる
前中葉よりて父貫より多し世も生も多し其五次戸右位
左派氣泊濃石山守治大京望派流社西川東川江口神流北
後王小野のわく難る此若しは山姥のまを女をハあらず
あると名所四遊を歴遊し多しと思ひこまな女此れ多す
とくなまを至る此地はふりすめり父ハ父ハ但由ハ下り多し
と此作る多し後今集云あつふといふをゆくまのこまといふ
ニアハてなむき乃なるいふをさすこまゆり紫式部

夫木抄云逆江
タト云山ヲ見テ
紫式部コニカリ
ヒノ、杉ムラウツム
雪オシホノ松ニケフ
ヤハカレコレモカ
任國ノトキノ芳丸
ヘシ続拾遺集
ツノシニニカレリケル
トキニヤコトモ女友
タケノモトニシカシテ
此紫式部ニハカク
ハタニ身ノモロハニ
タチサレモトオモ
ハニシカハ

とてわしんゆきよまらるる世もあつたれ
こまのぞく培澤山ハ逆江浅井那を
とるも外祖常陸介為伝或は母れわくるを
一節のなと詞のわのこりてわくこまやるぬ物なるを
男れわいしぬるも戸で茶をこし多し如くも上の京
かまらぬさすれを志を流をすして下れきこまハ
上をわしひるむや武ア多し中れ志ある生をこまい
こまらぬ戸なるもまをこまをこまを武部たれこれ
石山の冥物をこまもかのし此物語は来あるし親多
あつたと思ひくらも後人の臆説して武部を志くさるもこれ
いふ一太の七るこまあひ多し人ぬあつてまらるるれ
前後ハ此物語はれ物なりとこと物なり

其三 修撰年序

日記 寛弘五年 云左馬頭繪公任 ありしは此ころを以てむすべし

やきやういふとうちひあふ源氏よりさき人足え強うぬえれり
へまといをむし強ひむしすねある

今按此文を以て見れば物後と今年とを以てあし出でてこ
やく之中に流布して男ういふもさかた多れと云式

初てうて若紫と稱えられたり

又醍醐云内のう醍醐院の源氏れ物語人よりさき強ひたり

—わ—りらり云々

今按この後漢字や追初—多れと云ふは皇女との
ことと定火の—

又日記云源氏の物語おまへにあるを教讀後して云々

今按河海抄は寛弘の始よりさきとて一也 然るにこれの
父よりさきと云ふは長保の末寛弘の初—先式部
やとめ位まで里子傳るつゝ—は作らざるが寛弘五年
是に長公軍三策を以て初に教讀をのこし日下は後教
の戸を多しむしむし—を思はひて若姫とも見え
又云々—と云ふは—中多しむしむし—を思はひて
また長公軍三策は初に教讀をのこし日下は後教
ふとてさきと云ふは—を思はひて若姫とも見え
と式部三策あり里子も作らざる—は—也
ろ—と云ふは聰敏なる人を見よす不日は也

榮花物語作者考評
別有之
大意
榮花醍醐帝天曆七
年ヨリ堀河院寛治六

をなす物語也此物語も世にのみ多やましくも物語
なりし後の人より書き生きたる例も亦奇
妙不思議の物語なりて親多し眞物あるは父為的
か力多し或ハ河原殿の加事などさす此腔説を中
見ると或る或るの書成考るるをわらへといふ
し或人の云榮花物語 浦のふ 長徳二年此父は内大臣
伊周公此形をわらへといふ光厳天皇もわらへ
といふ事と出ると然ハ此物語ハ長徳より前か書て
世に流布し多し其も赤染也伊周公を源氏下
多しといふ出ると如何答云ふは此も為章といふ榮
花を赤染も作すといふ事ハ之れハ所傳多し

年ニテ百五十二年記ナリ
才子鶴ノ林巻ニテ赤染
衛門作ナルハ跋ノ詞トホ
シキ詞巻尾ニ見ユオ三十一
殿上花見巻以下ハ出羽弁
カ作ナレハ此巻ニ弁ノ哥
始テ見ユテ後ニモアリ又
私考根合巻云榮花上
ノ巻ニ殿ノ内子オハシサス
トナシハニトカケリサレハ
鶴ノ林ニテ上篇トモナ
クマ 大鏡巻尾ニ鶴
林ニテ三十篇ノ名目ヲ出
シテ世継物語ノ目録トセ
リ世継榮花ノ名ナリ
アキラケシ其ハ殿上花見
以下ハ目録ニ見ユス
後人ノ作ナルヲ證トス
ハシ

年ニテ百五十二年記ナリ
才子鶴ノ林巻ニテ赤染
衛門作ナルハ跋ノ詞トホ
シキ詞巻尾ニ見ユオ三十一
殿上花見巻以下ハ出羽弁
カ作ナレハ此巻ニ弁ノ哥
始テ見ユテ後ニモアリ又
私考根合巻云榮花上
ノ巻ニ殿ノ内子オハシサス
トナシハニトカケリサレハ
鶴ノ林ニテ上篇トモナ
クマ 大鏡巻尾ニ鶴
林ニテ三十篇ノ名目ヲ出
シテ世継物語ノ目録トセ
リ世継榮花ノ名ナリ
アキラケシ其ハ殿上花見
以下ハ目録ニ見ユス
後人ノ作ナルヲ證トス
ハシ

くさくさ試みたる人々
して中うてぬ

其四 文章無双

延喜天曆以来
千載和文之冠

物類のうら和あるはびは詞とてよ美繁古今兼伊勢物語
うつわれとまなれ古作をたまはく出るもおかしき
まやまやとくたし吾國の風流をいつく多れぞ見る人を
して倦るをたまはくむ中よと大和婦をれうへなき
物之全篇富貴温潤の気象として官様は文章なれども
中よ山林出世あり市井田家あり貧困哀傷あり国情風俗ハ
是こころとて情をうつし景をこころとてありこれあり
の人よむらひて所ありふこころ全神ありて又おのころ

雲隱卷ト云モ
一卷アリ世ニ脱
簡ト思ヒ其
文章ヲ見テ柔
弱論スルニタラス
必ク後人ノ作ナ
ヘシ如庸神而宅
偉幹不成令器

ら序は作あり跋あり記あり論あり書ありて諸作をるこれ
里くれとくきの不定ハ神ノ奇妙なる物之為章ついで其章
後を跋先何れも序して云論彼あり編抄あり編脈あり編
尾あり幕あり細あり巻あり雅ありむき繫あり簡あり帰
し波瀾頓挫照應伏案をいふありこれ文法をのりて
て里とく脈ハ悠揚として寛裕とて文勢ハ周流にして婉曲
これ不定のこころありて漢文とて見ゆハ史記莊子韓柳歐蘇
一巻後里とて此をいふこと
し多れは漢文納む女氣狭かりてさきりてさきりて
初ありハよよとて物之回目より編成へりす
以上不定の
序は畧

或人云式部の文章をよそ何れも実録をくすして不用れ
作物後を強してしやすハ誨諭の媒となることいふも念なき
るるやや答云い道なるる為め男子をくぬ歌をを
男子をくすハ一初の國史をえるびと兼代の龜鏡を
とる人ゆりて中ハ女の事ともも英女のゆいおりありをえて志
ときれハ似らずもき物後の事を 閩門の風候用意を教へる
歌をももちて式部之物後と日記をももちて其の氣ををせて人をしてしてら
くすハ式部ハいはゆる基に記るをせて人をしてしてらら
あるるをもちていはゆる人をもちて一実録を記するももも
くすハ女子の似らずもちていはゆる基に記るをしていはゆるももも
たるもちてハ式部の平生ハ用意といハお遠きといハ但志ひく

実録をりしははれ日記ハ是なりら 実録をちてゆへハ兼花物
後の事ハ甚く合くてもをとりらひ多量ニ日記をして
記するももも 兼平年ハ甚く合くてもをとりらひ多量ニ日記をして
いはゆる今傳ふ日記ハ此也又云此物後をももちて其の旨をくする人
ももちて此風候用意をくするももも 男も女もかめるも一箇の好
人をももちてして誨諭といはゆる玉凡ハ嬖奔れ詩をのせる
ももちてさるともあるハ也 兼平勅戒ハ詩哥ハ徳をももちて
先達の事ハ下寧るもももハカレル 愚ろといはゆるもももも 勅戒
らんといはゆるもももも 兼平勅戒ハ詩哥ハ徳をももちて
物後人をももちて誨諭といはゆるももも 兼平勅戒ハ詩哥ハ徳をももちて
ももちて兼平勅戒ハ詩哥ハ徳をももちて兼平勅戒ハ詩哥ハ徳をももちて

此物... 此物... 此物... 此物... 此物... 此物... 此物... 此物... 此物... 此物...

其五 作者本意

此物... 此物... 此物... 此物... 此物... 此物... 此物... 此物... 此物... 此物...

本朝文粹三善
 清行封事云弘
 仁承和二代尤好
 内寵コシラフ後
 代ノ誠ト相産
 卷ヨケケルナルニ

か... ひ... あ... 例... 相... 此... 後... 弘... 帝... 徳... 此... 弘... 帝... 徳...

久里尾結守の又あき居れうてき名をいひしやうへ次
はてしなきの巻は別定ハ一篇の女誡有れ女をいふ女はうな
とせ多くこそ又中操と斬留萩の困基のまき戸閨中を思
おれ家よいぢうがきと教戒あはる物こそ中操を人
としてやまんと思ひしうては貞操いふも物よて式部
志之又次は夕顔をてなりし多る扇よおしうく恥をさ
えさうあはれにしし恥とや恥おほうまぬへしうあはれ
やううおちし恥く物さうく恥にうれをさしうて
しうて横さ戸まきまらぬと違をましくあはる人よ
はらうてあはれをいふし源氏のうらびうるんれはあはれし人
いふうまかし源氏身と世のほろをよてうまに居てい

こくはうちまらひ多る貴公子は微行をい下しむ惟光
うらう道はあはれまらるる飛ハ程遠くは道習うる人こそ
をかりししこまらる以下れまらるる眼をいさし讀ゆ
こそ人の行跡情態鏡よりつてしうて奸醜のうらうりやう
世れいしとあはれまらるる作者は本意よりして徒作よれ
あはれまらるし申よもそ藤壺を源氏の恥して後子とて
ほふ直位よつをまらるるはるらち源氏執政し強ふまらる
公はこれ御鑑よりして國相以下れ身をいひやまらるる
福あはれまらるる書物後にもいふも罪をえあして少人の
いふまらるるをいひし御鑑よりして讀よしむる強き願を
志むるれまらるるあはれし學を云て人のうへまらるる

夕鳥巻河原院
融大臣ノ冥元
コト本朝文粹ニ
紀在昌奉宇多
帝之勅施行詔
誦文アリ

よひひわらふことこそはなむさしむる人の子孫のえが
よもあふすすもあふる子を後の世といひつゝ人させまかき
ぬしゝをふまこえさくといひし重くしめしるこゝろこゝろ
き弟紙のものと論じたるやうもやうも或部が意氣と名をたて物
論を定むる此言千古確論作事といふものもいふやうすゝるもれ世はさく人
うを述べ勅を懲悪を好くせしむる此本意を志す
て海流北幸と見るとかゝり下れるや又詞花云葉巻のこ
もてあまや人の利鈍をいはずして多く栢室れまはる
を論あるごとく一凡一部の詞花といひ警戒といひ花実といひ
るゝら秋巻がまは此道の合體といふも道稱を傳へり

其六 一部大事

冷泉院の巻の巻或は作物語之ふくゆ法はるるやなうれといひ
或は子細あるるや志をるまよれを秘し或は此紙向のま
さし一部の物語をよみてあまはる戸かゝりてしやすもかゝる物
まをよむ式部の本意を志すやう物といふ一為章試に今書を
記して識者れを非を中ら傳へり

相壺巻云源氏北君ののつひは免しまるをせはんや其くさ
あまもえし後つづれうちよひつゝあつたれ流有さすを多
くいひし思ひきこえさくまうる人なこそ見ぬ人
ねくもわらへるやかくれし伏案をまうせし其後
つひは流巻飛カまはるし紫の巻もや懐妊を志すせぬ
かゝるは誕生あまひは立場をわらうして流即位とれを冷

世等伊周公弟
隆家罪ヲ蒙ル
シテナトヲヨリ
カタルヲ史記范
雅説秦昭王云
有秦氏者非王
之子孫トイハス
激シト思ヒアハス

源氏悔心作者本意

世いとおもひしうあやまらざるは今按此の如
うと思ふも苦れるも又いふ世にたるとも或部
取ら感して出るなまらして丁寧反覆言を後
やまら看るは是れ伊勢物語に三條后業平中おのよ後撰集に
系極古甚所元良親王葉花物語に花山女御実資公の女
源氏物語に兼景の女兼景の女
こころなきあまをさしこれと書きて物なきは日の本
まはあゆみしうなるをいしう後き等をゆ
り皇胤は一代とて在系氏孫系氏とてまあはれあはれ
ふれはたれとれらるる東海を物む魯仲連をわら
るる有壺に源氏のうらみしう冷泉院をうらみ結中こころあり

まらあやまらして源氏の凄然源カの飛かきしりいり皇胤は
中まれおしするあまのうらみあはれ相壺帝は清原の正一の子
源之神武に皇胤は血縁之伊勢に宗廟を祀りてさきひ天下
の蒼生を改むるをさきまらしてさきまら冷泉院の以後は
まら朱雀に正統のうらみもさきまら第一あはれや柳
一旦人倫のうらみとて皇胤のまらけいりまらまらいり
種も一や断絶をうらみしりいりまら下の言をいり
源氏の飛をあまのうらみしりいり皇胤のうらみ
ふら式の直言をいりしりいり用を物を記す部
尚の言を中にも披示する物を記す心をゆるこころもや此遺言
祖の諭を心をゆるこころも物のまらけをいりいり免をせを

後漢書... 二條后... の密事を思ふ... 史記... 秦... 始皇... 呂不韋... 胡無禮義... 嬴楚悅色... 蓋呂姓也... 伯翳宗廟至... 而絶云... 鶴林玉露... 羅大經... 又... 不知六國未滅而秦先滅矣何也

始皇乃呂不韋之子則是嬴氏為呂氏所滅也司馬氏歎人孤寡而奪之儲不知魏滅未幾而晉亦滅矣何也元帝乃牛金之子則是司馬氏為牛氏所滅云云此他の國の事を言ふことなり況や朝廷ハ皇神此を言ふを後ハ... 一守文... 此一件と一初の大有... 或人云...

なるては申さへ糸を失くが太くは里がちよお
まらまらいりて里の相うたふを浮世のるぐさ
以下述懐が戸一紀文と云ふ

九月十日涉産日記云大なる人の君小少物君との内侍并
の内侍中務丸君大輔の命婦大式部のおりし殿の宮旨よい
し多る人よれうきをそんぞ中せりしころを記すのい
こし物なるとも又事記しし程なりれど多らひなく
こしとひひとつは覚ゆ

今按中つて見事記しし程なりれど大式部新糸をたし

十二月廿九日文云志もあれ廿九日は糸をこし大式部新糸を
こしひのりぞいしこしと愛路の中と道しはかおまひおれ

こしよまへ多らるれよるもいとこし此身此程やと覚ゆ

今按初糸を思ひおる程にて糸新糸の程なりし
多らるれ物後日記をたして式部く氣象とて此時
宜きしと多し多らるれ大式部新糸紙法新糸
糸んと此中大式部を免して何を糸す寸べきと作せ
合されむ新糸れ式部さし多らるれ免づしき物
何うゆえとあしし程も糸す世法へしとてや
てふしと何れあしとて此物程を作しとてとて一
字をたしとてぬらなる式部が謙退ふき氣貫をた
ぬ人の喜物なりし父為めよくやとて史官考
を卒しとて多しとて里は竹をたしとて免れのとて

まさしく物語傳里いで多きを少く見し對て免し
きし讀むるを紫式部といふ名を聞きあはるる
河海抄云西宮大官安和二年大宰権帥大進也書後
しるハ成式部かきかくしと則ちかきかきしと云
院上上東門院^{あつらひ}ありる弟子や傳ると云る中かき
りようのしり傳えり此物語のめあれ^まとてあつらひ
里かき^りなるべき^し或^は傳^へるを^し石山寺^{いしがやま}返^り
して此^しを^り新^し里^り中^{ちゆう}を^り抄^し也^{なり}八月十五
て此^しを^り今^{いま}も^も佛^{はつ}の^{ぶつ}法^{ほふ}の^{ほふ}風^{ふう}情^{じやう}を^りう^う
色^{しき}ぬ^るは^ると^て佛^{はつ}前^{ぜん}も^もた^たて^て大^{だい}般^{ぱん}若^{じやく}經^{きやう}
やうを^り中^{ちゆう}の^の傳^{でん}の^の巻^{まき}を^り書^かき^し免^まる^る
られよ

いまし江戸の巻よこしハハ十五枚ありと云は
伝るとも後ノ罪障懺悔れ多し一般若一初六
取出ても納しむる今もはと云は
今昔河海をさしめり多し河海に神傳あり
傳を託しおをりるむいふくも見たり傳者
多しやはそいも人へを信し為章に
事ハ百といふはそれと云はるも和
然れどおが^りもいふも腹傳^{はつでん}と
世傳^{よせでん}源^{げん}範^{はん}政^{せい}朝^{てう}臣^{しん}授^{じゆ}要^{やう}
或^はア^の世^よを^り書^かき^し免^まる^る
冷泉院安和二年もは寛弘元年と云はる
紫日記を

後人字法十卷
 夕式部カ作ラ
 ラスト云説傳末
 二リナニ新抄末
 雜紫式部
 里ノ名ヲワカミ
 ミハ山シロウチ
 ノワリソイハ
 スミウキ
 此哥浮舟卷ニ
 三君ノカトノ出
 セリシカハ頼阿
 法師スニ宇治
 ノ卷式部着述
 ノ説ニ説ニ云テ
 明ヲカナレ凡人ノ
 區説トハニタラズ

してありし安和のころ或る多とひ生れし里よりいふに
 継ふつとれしつゆにちたきし里跡を成しつとる
 といふも多數を以て記さぬ云々此定云之右山系範
 のりハ稱名院内府七月十六日教石山ちりて彼或るの草を多
 てし昔れる式説なりつゆに多しと云後云ハうを信
 ちぬ之物鏡の風情をよみくち中へ高きぬを記すとて次
 大の石を虫とて先くまに付或説く此れうら之をれを
 後の人いふに初傳をせんし結矣其もつゆ多し相臺しを
 伝中より記さるし多里と見えし為章口く記述此河海の
 説を伝し彼自ら此般若尼戸不しくして石山ちりてあは
 ちまら増し遠為しとてまらを存のさるしつゆしとてやく定

云くしとつゆ一但源氏の間と名つをて式部く画像をく此とあ
 やり此机硯などを設けりし何れ此世何人の好むや
 又云く後法身と云くをへく五十四帖とすしてなるし一を権大
 納之行策しし法書とせし終て跡院へ来りせられりし法性
 寺実白奥書せしきて云此物伝世し法式部く作との思
 へり此比丘堂を加す所し云く
 今按正徹法師なども此説を伝して紫式部く云此是と一
 て友氏長者沙堂白庭堂をくして法はらるとくを皇御流
 抄ハ此奥書れるをありしをすしてされハ自然の
 するをくしとて為常の料簡有るハ自然の事とてなく一
 向日委傳しりてしこれ存し上は載る所くを存りてくをく

此奥書の事も知らず一知へし且道長公奥書に記され
 へくはいさゝか教といふれくおもふむ福の事あるべきは老
 比丘の相あつたす又寛仁二のころ乃長公四十一入道して法成
 寺にこゝを留りて人後多といふ神院に上東山院へ或教
 う先づいふ事ある源氏一教法前皇より入道教
 今のひさしに修り得るの法人もあつたといふ事なく
 憍慢の奥書に記すは奥書に記すをなく 或アカ
 せおしめて日慢の事ハ念及れは爲すも物に記す事ある
 事下此人此物語の奇妙なる事記す誰が多先にもあつた
 ことゝ知るべし

細流抄云凡日本此國史ハ三代實錄先孝天皇仁和二年八月

此評ハ藤原為
 業大鑑ヲ云ニ
 大鑑清和帝ヨ
 リ三條院ニ至
 ニテ將相名臣ノ
 傳記ヲセタリ

我邦古ノ儒者
 二詩賦曲歌詔
 勅官符封事對
 冊表序詞行文
 讚論銘傳記祭
 文ノライレモ漢
 家制ニカハルナ
 シノ史ノ祝願
 表自供養塔
 寺願文等ノ
 毛儒者ノ職ナ
 サハ佛家ニイテ
 通セタメ其任ニ
 アタリカケキ
 シルヘシ此上ニ和歌
 及我國史ニ通
 名爲時カ女ニ
 三子負荷父

中々此を記して其後の西史此物語を記すは醍醐の帝
 小皇記をよ上此日本紀をよし流むの途に尤廉也此
 兩者云々

今按作物語も似合ぬ事ハ記又あるは 是も葉花物語
 の評もやまひゆらん此も簡用ひし
 又云作者は亦此人をよして仁義五帝は乃川の色終は八中道
 實五は性理をさとる者也て末世は善根智成物也きき
 今按これをも又いふは此編也之世外抄物語は或も花子
 寓言よりいふ事あるといひあるハ史記左傳をうつせりといひ又
 台本よりいふ事あるハ天台は六十卷なる事ハ日諦の法門を
 おもひしを多里なりと儒仙の事もいふはひくもいふ事ある

業元ハ女ノ作
ナレハヨクツカラタ
ニタズノ何レノ書
シモワセルナレハ

て武初、本道もあしぬ道理、如く女里尤五十四帖の度、
中よりあつて、儒仏の道理も、るハ漢家本朝の存、思ハ
ふせ多き、ゆへに、あつて、その中、儒仏の道、あつて、人
ともあつて、実録、あつて、人ともあつて、福も、言、得て、講
あへく、なせし。

室相集、妄行戒を説く、云、中、ら、く、紫式、ハ、虚言を、以、て、
源氏物語、他、に、る、罪、も、多、く、地獄、に、落、く、苦患、志、の、ひ、は、地
獄、に、早、く、源氏物語、を、破、り、して、一日、経、も、て、と、つ、つ、あ、へ、し、
人の、後、に、思、て、多、く、も、多、く、と、あ、つ、て、た、よ、ま、あ、ひ、く、一日、経、も、
て、供、養、し、ら、る、は、是、れ、強、く、人、物、を、ま、
今、扱、られ、あ、中、に、妄、想、有、ん、ば、と、く、論、ま、ら、し、學、の、費、な、れ、と、也

新勅撰集、秋教、初、を、名、多、く、紫式、ア、多、免、を、強、疎、經、儀、書、し、
ゆ、り、多、く、あ、は、樂、系、喻、品、を、お、ま、り、ゆ、り、權、大、納、言、宗、家、法、の、あ、は、日、れ
と、や、ぬ、ま、ん、む、り、を、一日、經、儀、の、ゆ、り、を、ま、り、し、ゆ、り、を、の、せ、し、
し、と、も、れ、一日、經、儀、を、他、書、に、れ、き、勅、を、れ、あ、り、名、し、ゆ、り、を、又
表、白、し、ゆ、り、物、も、其、ゆ、り、を、他、書、に、も、や、ま、り、き、後、を、や、り、て、實、り、
又、思、ひ、ゆ、り、あ、り、て、或、ゆ、り、流、論、教、戒、の、物、説、を、之、に、ゆ、り、妄、行、の、罪、
お、あ、せ、し、も、る、人、識、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、
と、も、る、ゆ、り、凡、諸、抄、も、き、ゆ、り、れ、料、簡、後、説、あ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、
只、一、二、を、あ、り、て、他、を、例、し、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、
き、物、な、る、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、
と、も、る、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、
と、も、る、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、
と、も、る、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、ゆ、り、

此氣象を推量し日記の如きよきと此の實を考へ作し
しあやかしをくなくし

一篇貫串

荀卿カ虞氏春秋司馬遷史記トモニ窮愁ヨリ憤ヲ書ニ發シテ共ニ
一家ノ言ヲナス式部モ父為時ニ別レ夫宣孝卒メ二女子ヲ育シ
孤寡ナル薄祿餘世路辛苦ナルトモ當リテ此州紙ニ當世近古ノ
事實ヲ書ラハ風刺教誡ヲシルシ憤ヲヤスメテ見エタリ紫女ノコトキ
千歳ノ下為閨門豪傑トモ過稱ニハアラカルヘシ

抑為章むり竹園

伏見教寛監院
貞致殿

よゆま〜ゆ此物語を好く申

務大輔冬仲朝臣孔講新をさく先考

内田頭定方朝臣

の聞書

とてし中院通村の
うを柳弟子たる

又宗胤法楷

鳥丸資廣公
柳弟子

の論義を〜

中院亜相道茂此御説を〜水原河海花鳥岷江

とこれ諸抄よ〜ゆま〜ゆ後あつ〜向〜水戸侯

権中納言の彰考館よゆま〜李朝王記小右記権記九経記台記

玉海玉葉明月記以下近き此れ二水記を〜百初あ〜

四記を〜て取定よゆま〜ゆ不審此もゆま〜ゆ紫系

の布を〜ゆま〜ゆのゆま〜ゆ紫日記を〜

あ〜ゆま〜ゆ章法を〜ゆま〜ゆ小おの〜ゆま〜ゆ文新

情態と物語の張りあ〜ゆま〜ゆを〜ゆま〜ゆ此七編を草稿

李朝王記
武部心兼朝臣
作
小右記
後小松宮右衛門
後原資公
権記
権大納言行成
九経記
参議源経頼
台記
権大臣頼長

中先生のうらら七事此のうらあひしるる冷泉院の物のまき
もこれ大なる事也中先生此のいふ事をもつていふ
いふ事このうらあひしるる事也此のいふ事をもつていふ
先生此のいふ事をもつていふ事也此のいふ事をもつていふ
名もあふ事也先生此のいふ事をもつていふ事也此のいふ事をもつていふ
へき事也此のいふ事をもつていふ事也此のいふ事をもつていふ
末の事也此のいふ事をもつていふ事也此のいふ事をもつていふ

香竹居伴資矩

先生此のいふ事をもつていふ事也此のいふ事をもつていふ

年山先生あま氏ひろく信の書をいふ事也此のいふ事をもつていふ
四記前もいふ事也此のいふ事をもつていふ事也此のいふ事をもつていふ
て式部が女徳をいふ事也此のいふ事をもつていふ事也此のいふ事をもつていふ
もなむ事也此のいふ事をもつていふ事也此のいふ事をもつていふ
事也此のいふ事をもつていふ事也此のいふ事をもつていふ
此のいふ事をもつていふ事也此のいふ事をもつていふ事也此のいふ事をもつていふ
く校舎のついでに彼先生の事をいふ事也此のいふ事をもつていふ

藤原治定

一、此のいふ事をもつていふ事也此のいふ事をもつていふ

紫家七論一怡水戸相之家安藤新介為章所撰奇評確論可謂物語指南也翫味無飽寫以藏之

尚友軒牧月叟

高城野れ小萩うゆゑをさし免なうじうよふ多うくいし
ぬり記をあるい免くくよ多を記物くくとやよあこれな
取はづいようしあるいし免くくくくくくくくくくくくくくく
おむいしきおむいしきおむいしきおむいしきおむいしき
のゆいしきおむいしきおむいしきおむいしきおむいしき
くれもあむいしきおむいしきおむいしきおむいしきおむいしき

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
免て多くおむいしきおむいしきおむいしきおむいしき
おむいしきおむいしきおむいしきおむいしきおむいしき
おむいしきおむいしきおむいしきおむいしきおむいしき
おむいしきおむいしきおむいしきおむいしきおむいしき

多ふり記これいしや紫の昔よりいしきおむいしきおむいしき
享保才二十一曆次丙辰益春望

洛陽散人篤敬齋曲悒子朱印

寶曆三年癸酉仲秋十日於平安寓居倉卒書寫焉
明和二年乙酉二月晦日繕寫終業

神風伊勢意須比飯高郡舜庵本居宣長判

天明三々此れき所^レ筆^レ日^レ字^レ本^レ長^レ宣^レ長^レの^レか^レと^レう^レい^レぬ
か^レる^レ乃^レふ^レか^レひ^レめ^レお^レほ^レく^レれ^レを^レき^レも^レとの^レま^レま^レう^レう^レい^レり^レ
新^レよ^レ米^レと^レて^レあ^レは^レし^レつ

相^レさ^レわ^レよ^レあ^レま^レれ^レと^レま^レえ^レ—此^レ系^レ此^レ根^レを^レ多^レの^レ福^レと^レそ^レう^レま^レえ

み^レす^レ款^レ 百^レ船^レ度^レ會^レ縣^レ百^レ不^レ足^レ五^レ十^レ槻^レ園^レ主^レ人^レ荒^レ木^レ田^レ神^レ主^レ久^レ老^レ蔭

二月晦日よか^レく^レ之^レを^レ入^レり



